九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二条東院構想の変遷 : 明石の君母子の処遇をめぐって

田坂, 憲二
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/12105

出版情報：語文研究. 43, pp.11-21, 1977-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

二条東院構想の変遷

――明石の君母子の処遇をめぐって――

田坂憲二

二条の東院と六条院との間に、構想の展開を見ようとする視点は、早く高橋和夫氏の「二条院と六条院――源氏物語に於ける構想展開の過程について――」[注1]によって据えられた。この論は、その副題が示している様に、構想の展開――創作意識の進展、の問題を追求した卓越した論文群の一つである。その後、「思ふさまにかしづきたまふべき人」の考察などを通じて、大朝雄二、森一郎、伊井春樹、深沢三千男の諸氏によって、東院から六条院への構想展開についての論は、深化された。[注2]高橋氏の論は、これらの基盤となったもので、今日では定説化されたといってよかろう。一方、高橋論文を方法論の面を中心に批判した池田義孝氏の論も[注3]、無視出来ない面を持っているのも事実である。

本稿では、東院の着工から完成迄を中心にして、改めて東院構想の変遷について考えてみたい。又、それが何によって持たらされ、何を持たらせたのかも、併せて考察して行きたい。

（猶、以下において源氏物語本文の引用は小学館版日本古典文学全集を使用し、ローマ数字は巻数を、漢数字は頁数を示す。）

一

まず、澪標巻における二条の東院の性格から吟味してみよう。

冷泉帝が即位し、源氏が内大臣に任ぜられ、一門の人々の繁栄が述べられた後に、東院の造営についての記事が初出する。

①二条院にも同じごと待ちきこえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将中務やうの人々には、ほどほどにつけつつ情を見えたまふに、御暇なくて、外歩きもしたまはす。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど、思しあててつくろはせたまふ。（Ⅰ二七四）

内大臣として政界に復帰した源氏は、以前の様に邸外の女君たちを自由に訪れることは出来ない。「御暇なくて、外歩きもしたまはず」は、二条院の召人たちにも相応の情をかけてやるため、というのがその直接の理由であるかの様な記述だが、読者はそこに、大臣として、著しく行動性を殺されている源氏の新しい姿を看取するであろう。恋愛人光源氏には、最早、奔放な行動を保証してくれたか

つての自由な空間は望むべくもないのである。政治人としての光源氏像が、澪標巻後半以降明確に造型されてくることは、既に指摘されており、[注4]恋愛人としての光源氏像も、軌をほぼ一にして、一つの転換点へと到っている。二十九歳という年令が、内大臣という地位が、その転換を要請する。さすれば、邸外にいて訪れることが難しくなるのであろう女君たちを邸内へ、という構図は、極めて自然なものとして、その登場が予測される。

前掲①で具体的にその名前があげられた花散里以外に、明石の君母子も、東院入りをはっきりと予定されている。①に続いて、「まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかに」と、明石の姫君誕生のことが語り始められる。そして宿曜の予言によって、姫君が后になるべく運命づけられているということが述べられた後で、こう記される。

②「……さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな。このほど過ぐして迎へてん」と思して、東の院急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ。(Ⅰ二七六)

注目すべきことは、明石の君母子は、東院造営計画において二重に関りあっている、或いはその可能性を有している、ということである。明石の君は「心苦しき人々」の一人であり、東院入りが考えられるし、姫君は后になるべく運命づけられているのであるから、源氏の膝下に入るために東院入りすることが考えられる。そして、本文を追っていく限り、この時点においては、東院との関りは、明らかに姫君の方が強いのである。[注5]「このほど過ぐして」は「姫君が旅行出来るようになったところで」の意であろう。それは、数か月の後には可能である筈だから、東院の造営を急がせるのである。

そして五月。花散里を訪れた源氏は、筑紫の五節を思い起こす。

③かやうのついでにも、かの五節を思い忘れず。また見てしがな、と心にかけたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。……心やすき殿造りしては、かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にも、と思す。かの院の造りざまなかなか見どころ多く、今めいたり。よしある受領などを選りて、あてあてにもよほしたまふ。(Ⅱ二八九)

「思ふさまにかしづきたまふべき人」をめぐって諸氏に論のあることは、上述の通りである。ここでは、五節を「また見てしがな、と心にかけたまへれど、いと難きこと」である理由が、「公事もしげく、ところせき御身」であることを指摘しておく。即ち、①の「御暇なくて……花散里などやうの心苦しき人」と共通の地盤に立脚した発想なのである。

花散里、明石の君、筑紫の五節と並べてみると、いずれも、須磨・明石流謫時代の源氏とかなりの交渉を持った女性であることがわかる。とすれば、この東院の造営は、流離譚構想の一つの結末として捉えられる側面もあるのではないだろうか。こう考えてみると、明石巻末の場面が重要な意義を持ってくる様に思われる。不遇時代の源氏と近しかった三人の女性。今の源氏には彼女たちを訪れることは難しく、手紙だけの往復。あの明石巻末の記事は、三人の女君の消息をさらりと描いているだけなのだが、東院の出現を要請しているかの様にも感じられる。

流離譚構想との関係については速断を避けるにしても、この段階

迄において、東院は、「ところせき御身」となった源氏が、明石の姫君の処遇をも含めて、「心苦しき」女君たちを一堂に会させる意識によって計画されている、と位置づけることが出来よう。妻妾集団化、とも言うべきものを目的としたのが、着工時における東院本来の姿である。これを、東院第一次構想としておこう。

二

次に、明石の君母子との関りについて委しく見てみよう。

「明石の女の物語」と「紫のゆかりの物語」との二つのプロットが、密接な関係にあるのは言うまでもない。思えば、源氏物語第一部において、この二人の女君だけが、光源氏を間に挾んで実質的に対峙したのであった。「明石の女」と「紫のゆかり」この両者は、若紫巻で「紫のゆかり」が初めて姿を見せる場面の直前に、良清によって「明石の女」の噂が為されるという様に、その登場時から隣接させられている。もっとも、この場面で語られる(明石の女)と、後に明石巻で登場してから以降の明石の君との間に、年齢的に矛盾があるということは既に指摘されている通りで、そこに、玉上琢彌氏の言われる短篇物語としての若紫の可能性(注6)も出て来るのであるが、若紫巻執筆の段階で長篇化の構想がかなり進んでいたとする観点に立てば、作者が、「明石の女」と「紫のゆかり」とを何らかの形で組合せて考えていた、と見ることも許されるであろう。

ところで、この両者は、明石の姫君という存在によって、構造的に更に不可分なものとなっている。明石の君が姫君を生むということと、紫の上に子供がないということは、同一の構想の表裏である。明石の君は、源氏のために、その将来の栄華を保証する姫を生むために存在として登場してくるのだが、それには、正妻格であり、身分的に遙かに優位に立つ紫の上が子を儲けないことが、必要不可欠であった筈である。その条件が充足されることによって、初めて、受領の娘の生んだ子が、后がねの姫君としての地位を約束されるのである。一方、紫の上にとっては、このことは更に大きな意味を持っている。それは、しばしば指摘される如く、源氏との愛情の絆によってのみ存在するという、紫の上の本質的な姿を維持していく役割である。子供という有形の絆と、それによって保証される母親という安住の座とを、余計な夾雑物として排することによって、紫の上と源氏との関係は、純粋な愛情にその重点をしぼり、両者の関りあいの不安定さと、逆にそれに基く新鮮とを描くことが出来たのである。(注7)この様に、明石の姫君は、「明石の女の物語」と「紫のゆかりの物語」の重要な結節点に位置しているのである。

一方、后がねであり、源氏一族の将来の栄華を支える役割を担っている明石の姫君は、いつまでも受領の娘の手で育てられることなく、源氏の正妻格であり、物語の女主人公的地位にある紫の上の手で養育されるのが、極めて自然な成り行きであろう。とすれば、姫君が適当な時点で、明石の君の手から紫の上のもとに引取られるという構想は、二つのプロットが成立した段階と、極めて近い時から存在していたと見ることが出来る。

姫君譲渡の構想が成立した時、最低限決定しておくのは、どの段階でそれを行なうのか、ということである。その場合、指標となるのは、姫君の年齢、その成長の度合、と考えるのが自然であろう。裳着の時では遅きに失するのは言うまでもないし、乳児の間は、母子のいずれにとっても酷であるだろう。こう考えてくると、薄雲巻

で実現した様に、一応乳離れした後の袴着の段階が譲渡の時期として予定されるのは、極めて当然であると言えよう。袴着は、三歳で行なわれるのが当時一般的であったから、[注8]年齢的にも、又、譲渡の口実としても相応しい様に思われる。その設定は、簡単に作者の脳裏に浮んだことであろう。松風巻末で、源氏が「蛭の子が齢にもなりにけるを」云々と、紫の上に姫君養育の話を切出す描写は、三歳ごろという意識が、作者を強く捉えていたことの反映とは見られないだろうか。

姫君誕生の報を受けた源氏は、東院の造営を急がせる傍ら、明石に乳母を派遣し、五十日の祝いを届けさせる。明石の人々は源氏の誠意に改めて信頼感を強くする。源氏は姫君のことが「あやしきまで御心にかかり、ゆかし」と思い、紫の上に、「呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と、それとなく話を持ちかける。明石の君も「げにうしろやすく思うたまへおくわざもがな」と源氏に文をしたためる。作者は、明石の君母子を近々上京させるべく登場人物を操っている、と言って良さそうである。しかし、「見せたてまつらむ」という発言があるにせよ、乳呑児の明石の姫君を直ちに紫の上が引取るという可能性はないであろう。しかも姫君の京の邸としては、東院がはっきりと予定されているのである。とすれば、明石の君母子の上京と、姫君譲渡との構想は、作者によって如何に結びつけられているのであろうか。

前章で述べた様に、東院と明石の君母子との関りにおいて姫君が主体であったことを考え併せると、例えば次の様な構図を想定出来ようか。第一段階として、姫君は明石の君と共に上京、東院に入る。(姫君一歳) 第二段階として、紫の上の手許に移り、后がねの姫として二条院本流の中に組込まれる。(姫君三歳) 一方、姫君に寄添う形で東院に入った明石の君は、女君の一人として残ることにより、東院は妻妾集団化の邸として完成する。これほど確固たる予定が立ってはいなかったにせよ、流離譚構想の一つの結末として、とにかく明石の君母子を一応上京させ東院に入れて、それから物語を展開させよう、とする意識は読取ることが出来よう。

いずれにしても明石の姫君は、明石→東院→二条院と、短期間に二度移転しなければならないだろう。又、明石の君も、安易に上京、安易に姫君を譲渡という形になり、別離の場面における母親の心中の相剋を描こうにも、その緊張性が著しく弛緩したものとならざるを得ない。東院第一次構想下では、明石の君母子の取扱いに関する限り、未熟な手法による展開しか考えられないのである。作者は、自らその事に気付いたのではないだろうか。この直後、明石の君母子の上京問題は、大きく軌道修正される。その事は、次節の、東院造営期間の内部構造の検討で明らかになるであろう。

三

東院は、着工が源氏二十九歳の春、完成が三十一歳の秋であるから、この間、約二年半の月日を費している。森藤侃子氏の指摘される様に、二年半という工事期間は当時としては、どちらかと言えば長期の例に属するものであろう。[注9] しかも、この二年半の内容を分析してみると、等質の構造を持っているとは言い難い。造営関係の記事は、二年半の内の最初の数か月間、澪標巻前半部分に偏在しているのである。[注10] 前掲①～③によれば、

二条院の東なる宮……二なく改め造らせたまふ。(源氏二十九歳、二

月）東の院急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ。（同、三月）

かの院の造りざま、なかなか見どころ多く、今めいたり。

（同、五月）

と、着工してからの最初の数か月間は工事は至って順調に進み、五月には、かなりの段階迄造営が完了していることが知らされる。この記述を追って行く限りでは、作者は、東院の完成をそれほど遠い地点に置く意識はなかった、と言うことが出来る。然るに、この五月の記事を最後に、東院の工事の様子は一切描かれることなく約二年の時が過ぎ、源氏三十一才の秋に、松風巻頭で「東の院造りたてて」と、漸くその完成が告げられるのである。森藤氏の言われる如く「完成間近にして捨ておかれ」たという印象は否めない。[注12]

私はこの二年間の空白を、構想の変化を背景とした、作者の意図的な操作の結果であると考える。即ち、明確な目的意識によって、東院の完成が故意に延引されたと考えるのである。とすれば、そのことを要請した因子が存在する筈である。

松風巻を見ると、東院の完成が契機となって動き出したものが二つある。一つは、花散里の移転であり、今一つは、明石の君母子の上京である。花散里に関して言えば、源氏は「公事もしげく、ところせき御身」であり、滅多に訪問することが出来ず、一方、花散里の邸は「年ごろにいよいよ荒れまさり、すごげにておはす」という状態であり、東院の完成――東院への移転ということを、急がせる要素とはなっても、遅らせるものとはなり得ない。寧ろ逆に、その様な状態にも拘らず東院の完成が二年も遅らされたという意味で、この空白期間の重要性を示唆するものである。さすれば残る一つ、明石の君母子の上京を遅らせんがために、この二年間の空白が用意されたと考えることが出来よう。

前節で私は、姫君一歳の段階で明石の君母子を上京させることは、その後の展開を考え併せると、姫君は住居を転々と変えねばならず、明石の君の心情も深みのあるものとはなり得ないだろうし、優れた構成とは言えないと述べた。この弱点を克服するのが、姫君と明石の君をしばらく彼の地に停め、上京・母子別離（姫君譲渡）・袴着を一点に集中させる方法である。作者は、この様に構想を転換したのではなかろうか。そのために何よりも、前構想の下で実現が近いかの如く描いていた明石の君母子の上京を、姫君袴着のタイム・リミットぎりぎりの姫君三歳＝源氏三十一歳の年の後半迄遅らせる必要がある。そこで、母子の京の邸としての役割も担っていた東院が、その造営を中断され、物語の表面から消えるのである。この様に考えれば、東院造営過程における二年間の不可思議な空白も、納得出来るのではないだろうか。一方、松風巻に先行する蓬生巻の記述も右の様な推測を強く裏付ける様に思われる。

蓬生巻で、源氏は、零落しながらも昔に変らぬ心を持つ末摘花を発見し、手厚く庇護する。

④御文いとこまやかに書きたまひて、二条院近き所を造らせたまふを、「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童べなど、求めさぶらはせたまへ」など、人々の上まで思しやりつつ、とぶらひきこえたまえへば……（Ⅰ三四三）

これは賀茂の祭の頃の記事であるから、年立的には前引②～③間のこととなり、東院の工事が順調に進展していた時期に属する。然るにその直後、蓬生巻末では次の様に述べられる。

⑤二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。（Ⅰ三四四）

末摘花は花散里と同様の理由で早急に東院に引取られるのが好都合であるにも拘らず、東院の完成は遙か二年先のことであると、作者によってはっきりと意識されている。決して妥当なものとは意い難い二年後の完成を、何故、蓬生巻末の段階で先読み出来たのであろうか。それは、年立的意識の極めて濃厚な要素と、東院の完成とが、作者の脳裏で結びつけられているからである。即ち、明石の姫君の袴着の年を、東院完成の年とはっきり計画していたからこそ、この時点で東院完成の年を明確に記すことが出来たのである。

ところで蓬来巻は、稲賀敬二氏の指摘された兵部卿宮の呼称の問題など[注13]もあり、玉鬘系十六帖の中でも、特に後記挿入の可能性が強いとされてきた巻である。この二年後を先読みした記述と後記挿入の問題とを結びつけて考えられたのが、高橋和夫氏の「源氏物語第一部における若紫系と帚木系の問題」（『源氏物語の主題と構想』六六～六九頁）であり、更にその考えを推進されたのが大朝雄二氏の「並び蓬生をめぐって」[注14]である。特に大朝氏の論は重要な問題提起であるので、以下、氏の高説に対して卑見を述べさせていただく。

大朝氏は、東院構想から六条院構想へと発展し、花散里が六条院へ移ったために、主なき邸となった東院に住むべき高貴な女性が必要となり、末摘花を登場させるべく蓬生巻が後記された、と述べられる。しかし、それほどまでにして、東院物語に結着をつける必要があるだろうか。氏は「澪標巻で力説された二条東院造営の意気ごみを一片の反故たらしめないため」とされるが、東院が意気ごんで造営されていたのは、第一次構想における時期、即ち、前掲①～③の段階だけであると考えることは出来ないだろうか。源氏二十九歳の五月以降、二年余に渡って東院関係の記事が見えないということは、作者の東院そのものに対する興味が、やや薄れてきていると見ることが出来る。しかもその二年余の空白が、東院の側から要請されたものではなく、他の事情（明石の君母子の上京を遅らせること）によるものならば、物語において東院の占める位置は、はなはだ小さいものになっていると言わざるを得ない。花散里が六条院に移住したからといって、一巻を費してまで新しい主人を求めるほど、作者は東院を重視していないだろう。

又、大朝氏は、玉鬘巻以降末摘花が東院を代表する女性として描かれている、と述べられる。確かに、初音・行幸・若菜巻はその様な記述であるが、一方匂宮巻[注15]において、花散里は、源氏の遺産として東院を譲り受けそこに住んでいることが記されるのであるが、末摘花については何も語られない。これは、末摘花が既に死去した構想になっている[注16]と考えることも出来ようが、作者の意識において東院と最も強く結びついていたのは末摘花ではなくて、やはり花散里であったためではなかろうか。

四

澪標巻の半ばで二条の東院が姿を消してから二年の歳月が流れた。そして、松風巻冒頭でその完成が告げられ再び私達の前に姿を現わすのであるが、この東院は、あの第一次構想の東院と同じ性格のものと考えてよいであろうか。

⑥東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所家司など、あるべきさまにしおかせ

たまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありて、こまかなり。(Ⅰ三八七)

東院は、やはり女君たちを一堂に会させるための邸として完成した。しかし、そのことを目的として完成を急がれていた筈の東院が、明石の君母子の上京を遅らせるために、完成の時期を延引されたということは、この記述とは裏腹に、妻妾集団化の邸としての重要性が低下したことを示している。確かに、⑥の記載の様に花散里は東院入りをし、又蓬生巻末で約束された末摘花も移り住んでいることが後に明らかになるのであるが、こと明石の君に関する限り、全く異った展開をする様である。澪標巻において東院は、明石の君母子のいずれとも、それも姫君の方とより密接に結びついていた筈である。しかし、この段階に到って、「東の対は、明石の御方と思しおきて」と記され、姫君については言及されない。いかにも東院の計画は明石の君のためだけのものであり、姫君はそこから除外されているかの様な印象を受けるのである。その辺の事情について、更に検討をしてみよう。

東院の完成を背景にした源氏の強い催促によって、明石の君はやっと上京を決意するのであるが、母子そして尼君は、直接東院に向うのではなく、自ら修築した大堰の旧邸に入る。やがて、源氏が訪れて来て、東院への移住を勧めるのであるが、明石の君は従わない。

⑦「ここにも、いと里離れて、渡らむことも難きを、なほかの本意ある所に移ろひたまへ」とのたまへど「いとうひうひしきほど過ぐして」と聞こゆるもことなりなり。(Ⅰ四〇〇)

一方、源氏にとって、早急に解決しなければならない問題は、明石の姫君の処遇である。東院入りを肯ぜない明石の君を前に源氏の心中で、姫君を二条院に引取る計画が次第に明確になってくる。しかし、これはあくまでも物語展開上の手法であり、作者自身の意志は「東の対は、明石の御方と」計画する源氏の姿に投影しているのであり、松風巻冒頭の段階で、姫君の二条院入りは確固たる構想に支えられていると考えるべきであろう。作者は、それが抜差ならぬ状態に物語を追込んで行くだけである。

やがて巻は薄雲に、季節は冬に移る。

⑧冬になりゆくままに、川づらの住まひいと心細さまさりて、上の空なる心地のみしつつ明かし暮らすを、君も「なほかくてはえ過ぐさじ。かの近き所に思ひ立ちね」とすすめたまへど、「つらきところ多く試みはてむも残りなき心地すべきを、いかに言ひてか」などいふやうに思ひ乱れたり。(Ⅰ四一七)

どうやら作者は、源氏に東院入りを勧めさせて明石の君に拒ませる、という構図を意図しているようである。明石の君を無理に東院に移らせる意志はなさそうである。それは一つには、明石の君の人間像自体からも要請されることである。明石の君の上京を遅らせたことは、明石巻で付与された彼女の性格を、より一層陰翳の濃いものにする働きをした。「身のほど」の意識に苛まれ、住吉詣以降二年間日和見を続けてきたことは、彼女を東院に入りにくい存在にしている。上京をためらっていた明石の君が、やっと重い腰を上げたのは、東院の完成を背景とする源氏の強い勧めと、姫君の成長のた

めであったが、やはり東院入りする決心はつかずに、大堰の邸という修正案で応じたのであった。最早、明石の君は、源氏の勧めに従って、簡単にその生活圏に入って同化出来る様な単純な存在ではなくなっている。そこで作者は、東院を明石の君に拒絶される邸として、新たに活用している様である。東院は、紫の上に代表される二条院勢力の象徴として、明石の君には感じられる。その明石の君に東院入りを拒ませることによって大堰の地に釘付けにし、一挙に母子別離の物語を展開しようとするのである。この間の具体的な描写については後述しよう。

やがて、姫君は二条院の紫の上のもとへ引取られて行き、明石の君は尼君と共に大堰邸に残る。翌年正月、大堰を訪れた源氏は、もう明石の君へ東院への移転を勧めない。女君自身も、

⑨近きほどにまじらひては、なかなかいとど目馴れて人悔られなることどもぞあらまし。たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心地すれ（Ⅰ四三一）

と思っている。そして同年秋の薄雲巻末の場面では、源氏自身が、東院に移ろうとしない明石の君の心を認めているのである。

この様に、松風・薄雲巻における明石の君の東院に対する態度は一貫しており、その展開は極めて自然なものである。即ち、作者には、松風巻冒頭の段階で既に、明石の君を東院に移す意志は全くなかったのである。[注17]

東院は、当初は、妻妾共存の邸たることを目的として造営が始められたのだが、完成の時点ではその機能は著しく低下しており、寧ろ形骸化した存在であると言える。しかも明石の君に対しては、女君を大堰の里に停める役目を果している。逆に妻妾集団化を拒絶される役割を担っているのである。完成した東院は、澪標巻の第一次構想から大きく逸脱してしまっている。

しかし、源氏の栄華の物語において、妻妾共存の邸の必要性は、増大することはあれ、減少することはない。それがどの程度具体化されていたのかという問題は別にして、松風巻冒頭で東院の完成した段階で、作者は既に、主要な女君たちを一堂に会させるべく新たな邸宅を計画していた、或いは模索していたといってよいだろう。それは或る意味において、東院第一次構想への回帰なのである。

さて私は、東院構想の変化は、明石の姫君譲渡のプロットと密接な結びつきがあると前述したのであるが、それが具体的にどの様に描かれているのかを簡単に見ておこう。

東院の完成の延期という不自然さは、逆に、明石の君母子の別離の物語に関する創作手法の進展として捉えられる側面を持っていた。上京――別離の時間的接近は、物語の緊張性を著しく高める。創作手法の進展は、更に、舞台を大堰の里に求めたことにも示される。身分的落差故に姫君を手放さねばならないという、明石の君の荒涼たる心情の背景として、作者は、厳冬の大堰川のほとりの山荘と、時空を設定したのであった。「冬になりゆくままに」「いとど心細さまさ」る、大堰の里を物語の舞台に求めたのである。

⑩雪霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまざまにもの思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見ゐたり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひ続けて、例はことに端近なる出でゐなどもせぬを、汀の氷など見やりて……（Ⅰ四二二）

作中人物の心理の投影としての自然を描くということは、源氏物語の開拓した方法であった。「雪霰がち」というのは、明石の君の心理描写でもある。姫君との別離の近いことを思い、汀の氷にぼんやりと目をやって、尽きることのない物思いを繰返している明石の君の心にも「雪かきくらし降」っているのである。源氏物語の心象風景としては、賢木巻冒頭近くの、野宮における六条御息所のそれが、屈指のものとされているが、この薄雲巻における明石の君の荒涼たる心象風景も、それに比肩し得るものである。この母子別離の物語が、哀しくも美しいものであることは、早く藤岡作太郎によって述べられていたが、[注18] 近年、今井源衛先生によって、その卓越性が的確に指摘されている。

ここに描かれているのは、そうした頃の厳冬、雪ふりしきる日の明石上の姿なのだが、別れを前にして、姫の髪をとかしてやっている母親の情の切なさが強く訴えてくる。……「かきくらしふる雪」はそうした苦悩に冷え凍ったまま、暗澹として乱れる彼女の心の象徴である。[注19]

この描写は、東院第一次構想下での、恐らくは東院を背景としたであろう母子別離の物語には、望むべくもない。東院構想の転換という犠牲の上に立って、初めて可能だったのである。

ところで、源氏物語の長篇構造の中で、明石の君母子の別離の物語が多少とも手直しされたことは、東院の完成が延期されたこと以多にも、小さな構想上のひずみを残している。例えば桂の院の存在もその一つであるが、このことに関しては別稿を期したいと思う。

五

以上の様な過程を経て、姫君譲渡の物語は成立したのであるが、重要な事は、姫君との離別直後、源氏の訪問を受けた時に「たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心地すれ」という意識を明石の君が持っていることである。姫君との別離という試練を越えて、明石の君が得ることが出来たのは、源氏との一対一の関係、つまり個の関係を維持出来る空間であった。勿論、この心語の背景には、「我が身のほど」という意識のあることは事実である。ともあれ、個としての存在を主張する迄に到った明石の君が、六条院世界という形で、再度、妻妾集団化構想に合流させられるとすれば、どの様な展開の可能性が残されているのだろうか。

少女巻で明石の君は六条院に移るのであるが、松風・薄雲巻で、あれほど克明に、繰返し明石の君の心情を描き、東院入りを拒まざるを得ない心現を私達に示してくれた作者は、今回は、口を閉ざして語ろうとはしない。明石の君が、東院の完成を延引する過程で、安易に妻妾集団化構想に組込まれる様な人間でなくなってきているのは、誰よりも作者がよく知っていた筈である。ために、今度は、明石の君の心を描くことを避けたのである。姫君を手放しても、源氏の訪れが稀れであっても、大堰の里を離れようとしなかった明石の君であった。薄雲巻末で源氏自身に、東院に移る意志のないことを認められてから、少女巻で六条院に入るまで、明石の君の側には、心境の変化の契機となるものは何もない。東院東の対から、六条院の独立した冬の町へ、という格の向上も決定的なものではない。明石の君の六条院入りを要請するものは、物語の構想である。

なぜ明石の御方は六条の院に今度ははいったのか。しかり六条の院に全員を集めることに作者が決定したからである。(注20)

玉上琢彌氏のさりげない指摘が言い知れぬ重みを持ってくる。

東院入りを拒んだのは、謂わば、付与された性格に基く明石の君の自立的行動でもあった。物語の長篇構想の一つとして、源氏の三十歳頃から始まる東院物語とでも言うものがあったであろう。しかしそれは第一次構想の段階迄であり、遅れて完成した東院は、著しく小さい存在となっていた。東院物語が消滅したために、物語にはぽっかりと時間的空間的な穴があいたのである。そこで約束された長篇構想から自由な時空が、明石の君が自立的に歩むということを可能にしている。しかし、そのことは半永久的に約束されたものではなかった。やがて東院物語の延長線上に、より確固たるものとして、六条院物語が浮び上ってくる。明石の君は、源氏の栄華の物語という長篇構想に奉仕するため、六条院世界に吸収される。そして、かつての自立性を再び保持しないよう「身のほど」の思想に固定された形代となってしまうのである。

源氏の栄華の物語の構想の切れ目に、僅かに展開した女の物語が、再び源氏の物語に組込まれて行く。そして、絢爛たる六条院の世界が幕を上げる。しかし、僅かの期間とはいえ、個を志向する女君が存在し得たということは、個を否定することによって成立している六条院世界の行先を暗示しているのではないだろうか。

注

(1) 『源氏物語の主題と構想』所収

(2) 大朝雄二氏「六条院物語の成立をめぐって」(『源氏物語正篇の研究』所収)

(3) 森一郎氏「二条東院造営」(『源氏物語の方法』所収)
伊井春樹氏「五節と花散里の登場の意義」(『文学・語学』第五二号)
深沢三千男氏「王者のみやび」(『源氏物語の形成』所収)
「源氏物語の方法——二条の東院と六条院——」(『国語と国文学』昭44・6)
東院と六条院は、「二、三段構えによる漸層法的展開の叙法」であり、試楽や絵合にも見られる作者の創作手法の一つである、とされる氏の結論には従えないにしても、松風巻冒頭の記述は、作者の計画でなく源氏のそれであり、松風・薄雲巻において、明石の君は東院入りを拒むという姿勢で統一されている、との指摘には、傾聴すべきものがある。

(4) 伊藤博氏「『澪標』以後」(『日本文学』昭40・6)

(5) 「新体制が一応整ったところで」(小学館版日本古典文学全集)とする説もあるが『源氏物語評釈』(玉上琢弥氏)に従う。

(6) 「源語成立攷」「背物語の構成」(ともに『源氏物語研究』所収)など。

(7) 勿論、愛情の絆というものの不安定性が前面に押し出されてくるのは若菜巻以降であり、第一部の世界においては、新鮮な緊張関係を維持していく紫の上の「あらまほしき姿」を描くことが目的であった筈である。

(8) 『日本紀略』によれば、冷泉・円融・花山・一条と代々の帝は三歳で袴着を行っており、彰子も三歳の時袴着をしたことが『小右記』(正暦元年十二月廿五日)に記されている。又、源氏自身も三歳で袴着をしたことが、桐壺巻の記述に見える。

(9) 「二条東院と明石君」(「人文学報」第八十号)
森藤氏は『栄花物語』から、東三条院南院(一年七か月)内裏(一年一か月)京極殿(一年十か月)の例を引かれるが、このうち、内裏(長和三年焼亡)は、同物語で予定されていた時よりも、かなり遅れて着工・完成するのだが『日本紀略』『御堂関白記』等で、他に内裏再建の記事を探すと、長保元年焼亡、長保三年焼亡、寛弘二年焼亡、寛弘六年焼亡(一条院)の際、いずれも一年ほどで再建されており、結論に影響はない。東院の二年半という期間も、造営関係の記事が適度に分散していれば問題はないのであるが、氏の言われる様に「完成間近にして捨ておかれた」ような書き方になっているので、改めて問題となるのである。

(10) 物語の筋立ての上から完成が急がれたであろう六条院（着工から完成迄約一年であるが、その間は、小学館本で約二頁にすぎない）は、別としても、東院にやや遅れて造営される嵯峨野の御堂は、着工が、源氏三十一歳の春〔山里ののどかなるを占めて、御堂造らせたまふ・絵合〕で、同年秋には装飾の段階に入っており〔御寺にわたりたまうて……堂の飾、仏の御具などめぐらし仰せらる・松風〕、翌年正月〔近き御寺、・桂殿などにおはしまし紛らはしつつ……・薄雲〕には、完成していると見るべきだから、物語の流れの中に適切に挿入されている。東院の場合は、これに比べると偏在の感は否めない。

(11) 後述する如く、蓬生巻に東院関係の記事があるが、蓬生は澪標の並びの巻であり、年立上は、澪標巻五月の記事よりも溯った時点のものとなる。

(12) 注(9)論文

(13) 猶、森藤氏は、明石の君の心情に即するため作者はやむを得ず東院の完成を延期した、とされるのであるが、私は、その様に作者が引きずられた形ではなく、作者によって明白な目的を持って行なわれたものであると、後述の蓬生巻の記述から考える。

(14) 『源氏物語の研究』第四章第二節

(15) 『源氏物語正篇の研究』所収

(16) 匂宮三帖別筆説に従えば論拠とはなり得ないであろうが、三帖のうち他筆説が最も強かった竹河巻が、今井源衛先生によって大きな疑問が投げかけられており△「竹河巻は紫式部原作であろう（上）」（「文学研究」第七十二輯）「同（下）」（「語文研究」第三十九号。）▽少くとも匂宮巻においては、同筆説を取るのが妥当であろう。

(17) 若菜上巻に、臘月夜を訪れるため、源氏が紫の上に向かって、「東の院にものする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、ものさわがしき紛れにとぶらはねば、いとほしくなん」（Ⅳ七二）と、外出の口実を言う場面がある。

(18) この点に関しては、池田義孝氏の説に従うべきであろう。

(19) 「明石の上の腹なる少女を紫の上請ひて子として養ひ、生母はわが子の行末を思ひて、離れがたき愛情を割く、この間の消息写し得てあはれなり」（『国文学全史（平安朝篇）』第三期第八章）

(20) 創元社版日本文学新書『源氏物語（上）』一五一頁

『源氏物語評釈』第四巻、四七二頁

受贈雑誌（昭和五十一年六月～昭和五十二年四月）①

愛文（愛媛大学）12／跡見学園国語科紀要24／碑29／愛媛国文研究26／愛媛大学法文学部論集9／演劇博物館収蔵品図書目録18／大阪府立大学紀要23 24／大谷女子大国文6／王朝文学19／岡大国文論稿4／沖縄国際大学文学部紀要4巻2号5巻1号／お茶の水女子大学音楽研究2／音声学会会報152 153／香川大学国文研究1／学苑421／学園論集29／学術研究（早大教育）25／香椎潟22／金沢大学教育学部紀要25／金沢大学教養部論集13／金沢大学法文学部論集23／金沢文庫研究22巻4 5 6 7・23巻1／関西大学文学論集26巻1／京都教育大学国文学会誌13／近世文芸稿21／近世文芸ノート（牛王の会）2／肇国396／月刊文献ジャーナル15巻6 7 8 9 10 11 12・16巻1 2／研究紀要（大阪大学医短）9／大阪城南女子短大研究紀要11／研究紀要（京都家政短期大学）15／北大古代文学会研究論集3／皇学館論叢9巻3 4 5 6／語学文学（北海道教育大学語学文学会）14／国学院雑誌77巻6 7 8 9 10 11 12・78巻1／国学院大学日本文化研究所報12巻3 4・13巻1 2 3 4 6／国語学研究（東北大学）51／国語学研究と資料（早稲田大学）1／国語国文（京都大学）45巻5 6 7 8 9 10 11 12／国語国文学報（愛知教育大学）30／国語国文学研究（熊本大学法文）11／国語国文論集（学習院女子短大）6／国語と国文学（東京大学）53巻7 8 9 10 11 12・54巻1 2 3／国文（お茶の水女子大学）45 46／国文学研究（早稲田大学）60 61／国文学研究ノート（神戸大学研究ノートの会）7／国文学資料館報7／国文学攷（広島大学）70 71 72 73／国文学論集（山梨大学）14／国文学論集（上智大学）9 10／国立国語研究所年報27／国立国語研究所報告56／古典と民俗（関西学院大本位田研）3／語文（日本大学）41／語文研究42